

その他

森林経済学序説

行武 潔

農学部地域農業システム学科地域農林システム学講座

(2007年10月16日 受理)

Preface of Forest Economics

Kiyoshi YUKUTAKE

Division of Regional Agricultural Systems

1. 経済学の学問上の位置づけ

1.1. 学問体系

学園紛争華やかかなりし頃の学生時代は、自分の価値観を如何に確立し、己れの2本足で歩いて生きていくかが第1の課題であった。自分に何もなければ不本意ながら学生運動に巻き込まれたり、巷のカルト的新興宗教に引張り込まれたりしかねない、時代そのものが戦後から抜け出したものの未だ進む方向を模索して激しく動いていた時代であった。折しも建築中の九大の電算機センターにベトナム戦闘機ファントムが落ちて、勉学、研究どころではなくなった時代でもあった。マルキストでなければインテリでないような風潮があり、経済学といえばマルクス経済学、それにあらざれば研究者ではないと厳しく批判された。林業経済学会も例外なくマルクス経済が主流で、勉学、研究云々の以前に自分の進もうとする研究分野の位置づけを如何にするか、どのような価値観の基にそれを勉学しているかを、明確にしなければ研究室にも居づらい時代でもあった。したがって、学問体系の確立とそこにおける自分の研究分野の位置づけは、至上命題でもあった。

私の問題意識は需給論、急速に市場シェアを伸ばしている外材と国産材との代替関係、何故これ

ほど急に外材が増加するのか、本当に外材は国産材の不足米なのかを、計量的に把握することにあつた。この問題解明には、近代経済学分けてもミクロ経済学の需給論（市場調整メカニズム）の勉強が不可欠であった。しかし、御用学者になりたいのかのとの批判も受けた。近代経済学を勉強するに当たって、自分なりに近代経済学の価値を見出し、位置づけすることが、マルクス経済学者と称した研究仲間に対抗して自分を見失わないためにまず必要なことであつた。このような次第で、定年を迎えてもなおいまだ未熟の恥を忍んで、筆者なりの学問の大系、位置づけの認識と理解を記しておこうと思う。

学問体系の区分は大きく形而上学と形而下学に分けられる。形而上学（*metaphysics* : *ta meta ta physika*）の起こりは、アリストテレスに由来し、感覚によっては得られない、すべて存在するものの最高原理を研究するものとしているようである。易経（繫辞伝）によれば「形而上者謂之道、形而下者之器」とある。こちらの方がわかりやすい。道とは老子道德経五千言の第一章にある「道の道（い）ふ可（べ）きは常の道に非ず、名の名（なづく）く可きは常の名に非ず。無名、天地の始め、有名、万物の母。・・・」の道である。つ

まり、首（はじめ）と走（はしり、すすむ）の合字で、宇宙の本源は無始無終に作用し続けているという意味を表した字で、宇宙の本体を称する表現、宇宙の本体は人間の意識で表現できるものではなく、名付けようのないもの（無名）、これが天地の始めて陰陽未分の一元を意味する。一方、器とは名付けられるもの、有名は陰陽二元で万物の母、有形のものといえる。要するに形を超えたものを対象にするのが形而上学、形有る五感にかかるものを対象としたのが形而下学といえそうである。九大時代のわが恩師は林政学の大家であると同時に、心霊研究の著名な専門家でもあり、退職後は日本心霊科学協会の理事長もやって居られた。この分野はいうまでもなく形而上であろう。筆者なりの形而上、下の区分をすれば、以下のようになる。

形而上学：超感覚界、宗教、玄学、オカルト、科学的分野（心霊科学、超心理学）

形而下学：感覚界、科学（社会科学、自然科学）ともあれ我々が対象とする学問は形而下である。これには次の二つが示される。

- 自然科学：没価値的普遍化科学
- 社会科学：価値関連的個別化科学

社会科学とは社会学、経済学、政治学、歴史学、民族学等、社会現象を扱う科学の総称をいう。なお、人文科学は広辞苑によれば「政治、経済、社会、歴史、文芸等広く文化系学問の総称で、狭義には自然科学、社会科学に対して哲学、言語、文芸、歴史等に関する学問の称をいう。」とある。

経済学の語源は、経世（国）済民の学、支配者の帝王学といわれ、政策の理論的基礎を求めた。経済学にはある価値観に基づく問題認識（目的意識）があり、経済哲学がある。科学とは客観的にみて誰もが正しいと認めることができるもの、政策はこの正しい判断に基づかなければならない。政策が科学にその根拠を求める由縁もそこにあり、学者や研究者は行政、業界等からしばしば学識経験者として政策立案、問題解決の委員を委嘱されたり、助言を求められたりする。これは正しい判断が出来る良識と見識を備えた、いわゆる **Doctor of Philosophy** として認められているからであろう。

我々は「客観的とは、誰がみても納得するもの、つまり見・聞・嗅・味・触という五感によって確認できる、形而下学範疇に属するもの」これを科

学と称している。しかし、この我々の感覚には限界がある、つまりそれだけ偏り、偏見がある。この偏見を取り除かなければ、あるいはそれを超えなければ、正しい判断は出来ない、真に人の世に有益な政策は出来ない。文字というものは実に深い意味を表している。「正しい」とは一に止まると書く、これは形があり、偏りのある相対界を超え、それを生みだした本源に立ち帰る、唯一絶対界に立つということの意味している。人と動物の違いは、考える差にある。考える、思うという心の作用は形ある世界を超えている。よく考えてみると、科学する心も形而上界によっている。

1.2. 学問とは？

“学問とは楽しいものである。学問とは生きることである。君が楽しくないのはまだ学問をしていないからだ（本当に生きていないからだ）。”と学生時代にいわれたことがある。日本が生んだ著名な文芸評論家小林秀雄に、である。生きることとは何か、生命のよって来る場所は何か、我々は何処よりきて、何処へ行くのか皆が解決できないこの謎を知ることが出来なくては、正しい判断は付きかねる。中国の老子道德経、日本の古事記、聖書にあるヨハネ伝、あるいは言い伝えられている民族発祥の物語の冒頭にはほぼ共通して、「無から有（陰、陽）が生じ、万有が生成されてきた」という万有生成の程序が述べられている。正しい判断が出来るということは、この世に生を受けた我々が生命の元をたどり、いわば命の元に先祖帰りを為し得て、初めて可能となることであろう。「父母未生以前の本来の面目に立ち帰る（自分を生んでくれた両親よりもっと前の本物の自分に立ち帰る）」ということである。沢庵禅師は暴れん坊であった剣豪柳生十衛に「闇の世に鳴かぬ鳥の声聞けば生まれぬ前の父母をぞ知る」という和歌を考案として出したという。果たして学問をし、科学している我々は正しい判断が出来ているのだろうか。

人類の歴史は2⁹⁰の先祖によってつくられた横の歴史で、個別的にはその結晶体が我々でDNAを見れば全てがそこに凝集されているといえよう。個人の努力では如何とも為し難い諸々の個々の能力差もそこにあり、仏教ではこれを良きにつけ悪しきにつけ業という。しかし、歴史を縦に見れば、万有生成の原理がつかめ、自分の何たるかがわか

るという。北畠親房の神皇正統記の「天地の始めは今日を始めとする理なり」に倣って、明治維新の大号令は、「天地創造の古に帰りいまより歴史を創るなり」ということのようにであったが、天地創造は余りにおこがましい、恐れ多いと、「神武創業の古に帰り、いまより歴史を創るなり」と謳われたと聞く。歴史を縦に見れば天地開闢の劫初は今、宇宙は無辺際それと認めるものが中心、歴史を作るのは宇宙の中心であるあなた方一人一人ですよということである。人間は小宇宙、内在する本物の自分を見出し、引き出せということのようである。

我々は好むと好まざるとに拘わらず、形而上の問題を無視しては存在し得ないし、学問あるいは科学することは出来ない。しかしながら、本物の自分に見参し、一に止まるのは容易ではなく、また形而下にある我々は偏見に満ちている。とすれば、正しい判断も出来ず、真に学問、科学することも不可能ということであろうか。“群盲象を撫でる”という逸話に例を取れば、形而下にある我々に偏見はあっても、そのことを自覚していれば、解決したい何らかの目的に対して、それに関する偏見(限り)ある情報を集積し組み立てることにより、より正しいあるいは真に近い“象”の全像を思い描くことは出来るのではあるまいか。如何に組み立てより確かな象を描くかは、後述の各自に起こるひらめき、直観より他によるべき方法はない。日本最初のノーベル賞学者湯川秀樹博士の中間子論は湯上がり時にひらめき、数学者の岡潔博士は乗っていたバスがトンネルを出た途端に難問が解けたとか、このひらめきは決して形而下で説明つく類のものではない。ある疑問を持ち努力の結果、その解を得たとき無上の喜びを人は感じ、生き甲斐を得る。学問をする、生きるとはそういうことであろう。偏見ある我々はそのことを自覚し、真摯に問題解決のための努力をし、その成果を積み重ね、より確かなものとする努力をすることにより、より真に近い正しい判断を可能とするのではなかろうか、学問、科学とは、そういうことではあるまいか。コンピューターが発達し、多くの情報を集積、瞬時に解析できるようになった今日、我々は以前にも増してより確かな科学とそれらを基にしたより正しい判断が可能ならずである。

2. 経済学とは？

経済学に対する捉え方は千差万別、経済学者の数ほどあるといわれる。ここでは対照的な2人の経済学に対する認識を紹介する。両者の比較検討は読者の価値判断に委ねる。

一人は、木内(1979)で、経済学会では余り知られていないが、経済、政治、政策的な実務分野では著名な人物で、近代経済学のあり方に厳しい批判を行っている。もう一人はサムエルソン(1983)で、近代経済学を総合化したと評され、経済学を少しでも学んだことがある人は聞いたことがある著名な人物である。以下に述べる詳細は、次の文献を参照されたい。なお、これらの要約に際しての誤解等があれば、その責任は筆者にある。木内信胤：*当来*の経済学、プレジデント社、462、1979

都留重人訳、サムエルソン：*新版*(原書第11版)サムエルソン経済学上、下、岩波書店、977、1983

2.1. 木内氏の経済学

2.1.1. 経済学は歴史現象

木内信胤の略歴：

1899年(明治32年)生まれ、1923年(大正12年)東大独法科卒、1925年(大正14年)横浜正金銀行入行、1945(昭和20年)同銀行退行後、大蔵省参事官を経て、1949～1952年(昭和24～27年)外国為替管理委員会委員長、1955年(昭和30年)世界経済調査理事長をつとめ、1990年91才で他界、1974年にノーベル経済学賞を受賞した新自由主義のF. ハイエクと親交があり日本の新自由主義を提唱した。木内はその著書(1979)の中で今日の経済学に対して、次のような批判をしている。

経済現象は歴史現象であり、経済学はそれを対象とし、自分独自の方法があるわけでもないにもかかわらず、経済学は独立した学問として出発した。

(1) **経済学独自の方法**：経済現象を人間の心とはかかはりなしに生ずる自然現象のやうなものとして捉え、それを探究するのに自然科学の方法を開いた。これが経済学を独自のお城の中に閉じ籠もらせた。経済学という独立の学問があるとは考えずに、人間社会の状況を研究する「人間社会の学問」の中で、特に「経済現象」、即ち財の生産とか消費とかいふ「ものに即した面」に重点を置

く一部局と考えていけば良かった。“またそれが人間社会の状況を研究するものである以上、人間社会の他の分野、即ち政治、社会一般、思想の動きといったものから、経済現象を切り離して考えるわけに行かないので、常にそれらとの関連において考えていく”といふ考え方で進んできたなら、“統計、方程式で表現されないものは相手にしない”＝現代経済学、生きた社会に起こっている経済現象を説明することが出来ないようなこと（数字で示されないこと：人の心の動きは考えようとしない）にならなかった。

（２）歴史現象の理解とは？洞察の深さにある：自然科学の大王様のような「物理学」と対比するとよくわかる。物理学には「法則」の発見があり、「法則」に合わないものは間違っている。しかし、歴史現象は例えば「徳川家康の日本歴史における意味」となれば何回も見直しが聞く。これが正しい見解といきることは出来ない。山岡壮八が「徳川家康」を書いて徳川家康のみならず「徳川時代」に対する国民の考え方で変わった、といふこともあり得る。歴史上の判断、意見はその「当否」が争はるべきではなく「洞察の深さ」だけが問題となる。経済問題もしかり、「判断の当否」はどこでみるか？間違ったことをいっているものは「否」のマークが当初から押されようが、「否」ではないものの間では時の経過とともにおのづから「優劣という名の差」がつく。漠然としているが一つの決め手である。「なるほどねと思ふ、いい議論だなあと思ふ」そういった人達の心の力によって何となく世の中が新しい方向に動いて行く。それでいい、それがいいといふことになると、政治の在り方までいまとはまるで違ふものが生まれてくる。

2.1.2. “わかる”といふこと、分析、総合、直観

（１）総合：“現代の社会科学”は分析の積み重ね、「分析」が本当に結構（有用）であるためには心の動きである「総合」が必要である。分析とは一応一つのものとして見えるものを要素に分解して眺める。情報の細分化をいふ。もしもそこで思考が停止して、「分析」とは全く異なる心の働きである「総合」といふことがないとすれば、細分化された情報は全く役に立たなくなる。「分析」が本当に結構なのは、総合を前提としていふこと

である。

（２）「総合」は分析の逆課程：機械は分解して組み立てれば、もと同じものが出来る。人間の心が作用すれば、既存の情報の中から複数のものを拾い上げ、その全体を「新しい知識・思想」として拾い上げる。即ち「総合」とは、自分の持っている知識全体、生活経験の全体（悩み、付き合い、喜び）が、一つの「体系」に組み上げられる。それが、総合の総合たる所以である。

「体系化された知識」を持ちうるからこそわれわれは、枝葉末節にとらわれず、大局的な見地から物事を判断できる。しかし、多くの場合、その体系は散漫で、不完全、しかし、本気で学問し、自己反省を怠らなければ、その「体系化」は逐次上等なもの、優れたものになっていく。“さうなることが学問をすることだ”ともいえる。分析することが学問することだと考えている現代の社会科学（この場合、社会科学といふ言葉がピッタリ）が、やっているような分析的知識の積み重ねではいくらやっても“役立つ知識”“ものごとに結論をあたえてくれるやうな知識”は得られない。そうするとますます分析に力を入れる。さうやって役に立たない末端的な情報の巨大なる山のようなものを作り上げた。これが現代の社会科学、特にそのなかの経済学である。

“ものがわかるのは直感力の仕事であって、知識を集積した結果ではない”

“人は物事の一部しかみることは出来ない。にも拘わらず全体を知るのである”

“およそ「人間社会の学問」に属する事柄の理解には「一様落ちて天下の秋を知る」といふ古語を実践に移す以外、よるべき方法はない。”

“わかる”とは予め相当の知識の持ち合わせが必要だが、ことは複雑でなかなかわからない。そして“どうかしてわかりたいといふ強い願望下に置く”と、さうしてあるうちにある日突然“あっ”と気がついて夜が明けたやうになる。これは直観の働きの模範例のやうなものだが、この“わかる”とは、“錯綜した関係にあった諸々の情報を、整然たる体系の下に置くための緒（いとぐち）に、突如として思い当たる”といふことがまずあって、その後その緒をたどることにより“わかる”，このようなドラマチックでなく静態的な“分かり方”もある。例えば，“インフレを止めるにはどうし

たらよいか”といふ方策を考えついたとすると、それは「インフレの理解」といふものが“何時とはなしに静かに熟してゐた”といふ経過を辿ったものと思ふ。何れにしてもこの“ものがわかる”といふことは、そのなかでも、特に大事なこと、むづかしいことがわかる場合には、「直観的判断」といふものが主役をなす。この“インフレの理解が熟してきた”といった場合にも、よく観察してみれば、それは、“いくつもの直観的判断の積み上げが、インフレといふ大きな問題の理解に導いた”とみるべきものと思ふ。この“わかる”といふことは、決して「分析的知識の集積」ではない。

(3) 理屈は後で付けるもの：事実はそこにある。“人間社会の学問”の分野における「判断」については、その説明は出来るけれども証明は出来ない”即ち、人間の歴史、人間の反応が違ふため、決して同一の経済現象が二度と起こる事はない。人間社会の「学問」とは、歴史現象である。すなわち、

- ①学識を養ふ（高める）ためのもの、「学識」とは「鍛錬された常識（常識も知識）」。
- ②常識を鍛錬するとは「AはB」といふ常識が、より確かなものとして自己の体系に組み込まれる。
- ③常識とは証明も理屈もなしにさうだとわかること。
- ④歴史現象に証明はない“洞察の深さ”が重要、但し、場を設定すれば（仮説を立てれば）、証明も可能である。

2. 1. 2. 経済学とはどのやうな学問か：3箇条

①「経済学」は「人間社会の学問」で特に“物に即した面”，それが“経済の面”であるが、それを研究する学問である。

②「経済学」といふ名の“独立した学問”は成立しないのだから、いつも人間社会の全体、政治も経済も社会も思想も、全て見渡しながら、そのなかの“経済の面”を考えるものでなければならない。

③「経済学」とは“歴史現象”を対象にするものだから、欲しいものは「洞察力」であり、「洞察力」とは、“繰返し”といふことの決してない日々新たな現象を、自己の欲する要点に置いて「如実に直感する力」である。

以上から、次の特徴が「経済学」に示される。

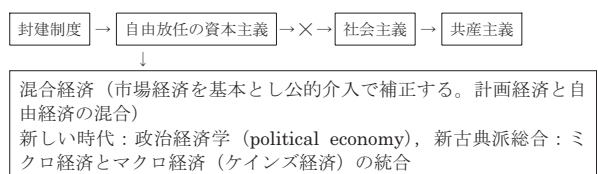
“経済現象は、「時事評論」即ち時事問題の議論としてののみ有効かつ有用な議論が出来る”

3. サムエルソン

Paul A. Samuelsonの略歴：

1915年シカゴ生まれ、1935年6月シカゴ大卒業後、ハーヴァード大学院1年で修士修了後、翌年学位論文“Foundation of Economic Analysis”を書く。そして新古典派総合の創始者としての功績を評価され、1970年第2回ノーベル経済学賞を受賞した。

サムエルソンは、歴史的制度の経緯を「不可避とされていた時間表、未開時代から封建主義へ、封建主義から資本主義へ、資本主義から社会主義へ、社会主義から共産主義へ」という時間表は、時間の経過とともに一つの寓話のようにみえてきた。しかし寓話や伝説、念願は人の心を捉えて離さないものだ」と指摘している。彼は市場経済を基本として、公的介入で補正する混合経済を示した。いわゆる計画経済と自由経済の混合時代を示唆し、ミクロ経済とマクロ経済の統合を図った政治経済学 (political economy) を示し、新古典派総合を提唱した。これを図示すれば、次のようになる。以下、サムエルソンの経済学の基礎概念を紹介する。



(1) 経済学を学ぶ理由

- 1) 身近の事柄に密接に関係（市民、家計の立場で直面する問題の理解、解決）
- 2) 政治的決定に関する問題（社会的、国家的問題：不況、インフレ回避、所得分布の不平等是正）

(2) 経済学とは？

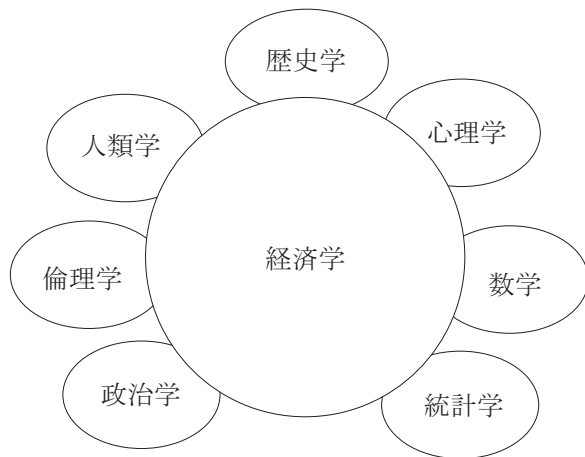
代替的な用途のある稀少生産資源をどのように利用（配分）することに決めるかを論ずる学問である（どの財貨を、如何に、誰のために、今すぐか、将来か）。

経済学は、他の重要な学問分野と境界を接している。社会科学、政治学、心理学及び人類学はいずれもその研究が経済学と重なり合う部分を持つ社会科学である。つまり人文科学と自然科学の両方の魅力を合わせ備えもつ、社会科学の女王であ

る。

経済学を体系的に学んだことのない人は提供される「経済学」の情報、聡明な消費者であればよい（チャーチル）。

政治経済学とは、どのようにして生活の質の改善と財貨の量増大との競合的選択をなしうるかを明らかにするのである。例えば、GNPとNEW（経済純福祉）。



（３）経済学での叙述と分析

経済現象の動き（生産、失業、価格等）を叙述、分析、説明し、かつ相互に関連づけて、体系的に組み立てる。経済学は統御された実験困難、観察するのみ、原因結果の正しい方向をだいたい定め得ればよい。非常に大きな前進をしたということになる。また、経済問題は感情的になりやすい。客観的に囚われることなく、事物をあるがままの姿でみる能力を養う必要がある。

事実それ自体は決して「自分で自分を解明することはないのだから、記録された歴史を解釈するには、どうしても分析的な道具を利用せざるをえない。確率論や統計学の数学的方法の応用は経済学の分野できわめて重要であるが、理論化することが必要だからといって、決して「一見は千の技巧に値する」という中国の格言を否定することにはならない。やはり事実なきわめて重要である。

（４）希望的な思考対根拠を持つ見解の相違

価格や雇用に関する経済上の数多くの基礎的な原理については大部分の学者が似通った考え方を持っている。

- 追求されるべき目標の当否に関する基礎的疑問は倫理学や「価値判断」の分野に属する。

- 人間は先入観や偏見、情緒、食欲の虜と同時に被害者でさえある。経済学の究極の狙いは世界を変革することにある。

（５）先後関係と因果関係の違い

数量的な経済的知識は完全であることからほど遠い。経済効果を分離するには、統御された実験が困難であるので、頭の中で他の事情が同じであるとして、素材の単純化、抽象化が必要となる。理論の正否は観測された現実を解明する上での有用さにある。

（６）何故経済学を学ぶか？

最終結論は経験にこそ語らせるべきである。ケインズ卿（1936）「雇用、利子、及び貨幣の一般理論」の最後に「経済学者や政治哲学者の理念は正しくとも間違っている、遙かに強力で事実この世界はそうした理念によって支配されている」とある。

最後に

アダム・スミスの「見えざる手の導き」は、利己心に基づいた個人の経済活動が社会全体の経済的利益に繋がるメカニズム、市場調整メカニズムとして理解された。つまり、個々の欲求に任せておれば、社会的に最も望ましい均衡解を得ることが出来る、という今日のミクロ経済学における市場調整メカニズムの原点、自由貿易を是とする原点がここにある。経済学の始祖といわれる由縁である。しかしアダム・スミスは単に皆好き勝手にやればよいと言った訳ではなく「道徳感情論」の著書で、人は心中に利害関心のない「公平な観察者」、正義（他人の生命、身体、財産、名誉を傷つけないこと）、慈恵（他人の利益を増進しようとする）を持ち、それ故に秩序だった心地よい社会が形成されるとしている（睦目卓生：やさしい経済学、日本経済新聞、1/26-2/6, 2007）。「見えざる手」にもちゃんとした倫理観があったわけである。現在、林業経済学会ではマルクス経済学者を自負する研究者はおらず、学会でも「国独資（国家独占資本主義）」「搾取」「農民層分化、分解」という言葉も聞かれない。先の本内流に言えば、時の経過とともに「優劣という名の差」がついた結果、「否」と出たということか。

旧制七校の国文学の某教授は、以下のような辞世の和歌を詠まれた。

「極まればまたよみがえる道ありて生命（いのち）はてなし何かなげかん」、ここまで詠みきれば人生に悔い無しであろう。また、某宗教家は辞世の和歌ではないが、

「うつるものおのずうつりておのず消ゆ己れは澄みてただひそかなり」と詠まれた。ここまで己を見極められれば、天地（形而上，下）を貫いた自分が見え、生き死を超える。出来れば生きているうちにここまで見極めたいものだ。明治天皇の有名な御製に、

「よもの海みなはらからと思う世になど波風のたちさわぐらん」というのがある。大御心のあらわれ、正に帝王学の発露であろう。経済学が経世済民の学で、帝王学ともいわれる由縁は、根底にこ

のような他をおもんばかりの心、慈しむ心があつてのことであろう。しかしまた、人は「我わが帝王、我わが主治医」であるべきともいう、帝王学は我々一人ひとりのものということであろう。老子は「至尊の自覚持て」と説かれたとか、お釈迦様は「天上天下唯我独尊」と。我々一人ひとりが世の中の主役、主人公である。世の中を認識、自覚出来るのは己れの目、耳、鼻、肌、口、心でもってしかできないのだから。

我々は己れの価値観の基に形而上、下を包括した確かな体系を持ち、それを更により確かなものへと鍛錬しだして、はじめて学問（＝生きている）していることになるのではあるまいか。